

Title	百済仏教の点描
Sub Title	
Author	志水, 正司(Shimizu, Masaji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1976
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.3 (1976. 4) ,p.44(212)- 44(212)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19760400-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

百濟仏教の点描

わが国への仏教の公伝は戊午（五三八）年で、百濟の聖明王によりもたらされたこと、いまは通説とみてよい。しかしながら、その百濟仏教の実態がどのようなものであったかについては、史料が乏しく不明の点が多い。それだけに僅かな史料も貴重に扱われるべきであろう。

梁書百濟伝に、聖明王のときのこととして、

中大通六年・大同七年、累遣使獻_レ百物、并請涅槃等經義・毛詩博士、并工匠画師等、勅竝給之、とみえている。百濟王の梁に請求したものが、涅槃等經義であつたことは注目される。

当時南朝仏教界にあつては、流入漢訳された夥しい仏典について、すべて仏陀一代の説法と見做し、成仏から入滅までに配列して体系化する努力、いわゆる教相判釈が行われたのであり、そのなかで涅槃経は、仏陀の最後の説法として位置づけられ、仏教の究極の妙旨が説かれ、仏の常住不滅を明らかにしたものととして価値づけられたのであつた。この理解の傾向は宋の慧観・道生らにはじまるが、その研究成果は梁の武帝時代の涅槃経集解七一卷に集約されたといわれる。

こうした南朝仏教界の動向を適切にとらえて百濟王の涅槃等經義請求のこともあつたのであろう。百濟の梁仏教への関心の深さ・敏速さが注目されるのである。

従来、百濟と梁との関係については、百濟の旧都公州・扶余の、塹築墳およびその副葬品・寺院址採集の瓦当など、もっぱら考古学的見地からその密接が指摘されてきたが、これらは上述の史料解説を側面から支持するものといえよう。

そして、そのような百濟仏教が日本に公伝されて、飛鳥仏教の一要素となつたことは深く留意されるべきであろう。

（志水正司）